

Mendessohn Beethoven

～WINDS CAFE vol.353～

2026年5月17日(日) 14:00

芸術家の家スタジオ

室内楽において、ピアノ・ヴァイオリン・チェロによるピアノトリオは、弦楽四重奏と並び、多くの作曲家達に愛されてきた編成です。ハイドン、モーツァルト、シューベルト、シューマン、ブラームス、ドヴォルザーク、チャイコフスキー、ラヴェル、ショスタコーヴィチらによって、数多くの名作が生み出されてきました。

本日はその中から、メンデルスゾーンとベートーヴェンによる、二つの傑作をお届けいたします。聴く側、演奏する側どちらの立場に立ってみても深い感動を感じる名作です。

ご来場の皆さまと音楽のひとときを分かち合えますことを、心より感謝申し上げます。

フェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディ(1809-1847)

《無言歌集第5巻》作品62より第6曲《春の歌》Lieder ohne Worte Op.62

《ピアノ三重奏曲第1番》ニ短調作品49/Piano Trio No.1 Op.49

I .Molto allegro agitato / II .Andante con moto tranquillo

III.Scherzo-Leggiero e vivace/IV.Finale-Allegro assai appassionato

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)

《ピアノ三重奏曲第7番》変ロ長調作品97/Piano Trio No.7 Op.97

I .Allegro moderato II .Scherzo-Allegro

III.Andante cantabile-Poco piu adagio IV. Allegro moderato

フェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディ

《無言歌集》第5巻 作品62より第6曲《春の歌》

春の訪れを思わせる、明るく親しみのある作品。原曲はピアノ独奏のために書かれたが、多くの編曲版でも広く愛されている。本日は、R.Klugescheid によるピアノ三重奏版でお届けする。

ピアノ三重奏曲第1番 ニ短調 作品49

フェリックス・メンデルスゾーンは銀行家の家庭に生まれ、恵まれた環境の中で豊かな教養と音楽教育を受けて育った。作曲家・指揮者・ピアニストとして国際的に活躍し、とりわけ度重なるイギリス訪問では熱狂的な支持を得た。しかし過労や心労が重なり、38歳の若さでその生涯を閉じている。

《ピアノ三重奏曲 第1番》は、ロマン派を代表するピアノ三重奏曲のひとつであり、現在も高い人気を誇る作品である。1839年夏に作曲され、その当時のメンデルスゾーンは創作の絶頂期であった。《ヴァイオリン協奏曲 ホ短調》や交響曲第3番《スコットランド》などの傑作も同時期に生み出されている。1839年秋、ライプツィヒにおいて作曲家自身のピアノで初演されたのち、出版に際して改訂が加えられた。さらに補筆・改訂を経た第2版が完成し、現在演奏されているのは主にこの第2版である。

作品は4つの楽章から成り、メンデルスゾーンらしい流麗で気品ある旋律美と、生き生きとした躍動感に満ちている。華やかなピアノと、三つの楽器による美しいアンサンブルが魅力である。

第1楽章

チェロとピアノによる憂いを帯びた第1主題で始まる。華麗な第2主題とともにドラマティックな展開を見せる。

第2楽章

第1楽章とは対照的に、思い出を振り返るような、叙情的で温かな楽章。

第3楽章

《真夏の夜の夢》を思わせる、妖精が舞い踊るような軽やかなスケルツォ。

第4楽章

リズムカルなロンド主題が力強く展開し、壮大なフィナーレに導かれる。

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

ピアノ三重奏曲 第7番 変ロ長調 作品97 《大公》

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンが1811年に完成させた、最後のピアノ三重奏曲。ルドルフ大公に献呈され、その名にちなみ《大公》の愛称で親しまれている。ベートーヴェンの弟子で、後援者でもあったルドルフ大公は優れたピアニストでもあり、ベートーヴェンと20年以上にわたり深い信頼関係を築いた人物であった。

ベートーヴェンは、それまで比較的親密な室内楽であったピアノ三重奏を、交響的な規模と豊かな精神性を備えた作品へと高めた。《大公》はその到達点とも言える作品であり、優雅さと気品、温かな叙情性に満ちている。1814年の初演ではベートーヴェン自身がピアノを演奏したが、これが彼にとって最後の公開演奏となった。

作品は4つの楽章から成り、壮大さと親密さが見事に調和している。

第1楽章

穏やかで気品ある主題で始まり、三つの楽器が対話を重ねながら、悠然とした音楽を描いていく。堂々とした構成の中にも親しみとぬくもりが感じられる。

第2楽章

リズムカルな動きとユーモアにあふれ、三つの楽器による緊密な掛け合いが生き生きと展開される。

第3楽章

深い祈りを思わせる、静かで崇高な変奏曲楽章。ベートーヴェン晩年の精神世界を予感させる、内面的で美しい世界が広がる。

第4楽章

第3楽章から切れ目なく続き、明るくのびやかなロンドへと移る。喜びに満ちた終楽章で、作品を晴れやかに締めくくる。

荒井智子 Satoko Arai/ヴァイオリン

東京音楽大学付属高校・同大学を経て同大学院修了。ヴァイオリンを景山誠治、浦川宜也の両氏に、室内楽を D.フェイギン氏に、ヴィオラを百武由紀氏に師事。東京音楽大学、東京音楽大学付属高校、及び、東京音楽大学付属幼稚園非常勤講師。オーケストラ・トリプティーク所属。

竹本聖子 Seiko Takemoto/チェロ

東京音楽大学卒業、同大学院修了。チェロを秋津智承、森純子、堀了介、ドミトリー・フェイギンの各氏に師事。アンサンブル、在京オーケストラへの客演や、レコーディング、ミュージカルでの演奏のほか、国内外の作曲家の作品の世界初演も数多く行っている。

江戸文化と現代音楽をベースとしたクリエイショングループ「淡座」「オーケストラ・トリプティーク」「アンサンブル・プラットフォーム」メンバー。渋谷教育学園渋谷弦楽器講座、吉祥女子中学高等学校課外授業、MAGICO 音楽教室講師。

百武恵子 Keiko Hyakutake/ピアノ

東京音楽大学、大学院を経て、パリ国立高等音楽院にて伴奏科、室内楽科を一等賞を得て修了。2007年文化庁海外派遣芸術家海外研修員。フランス国際コンクール室内楽部門第一位。在学中よりロンティボー国際コンクール、カザルス音楽祭などに公式伴奏者として参加。弦楽器クラス伴奏者を度々兼任し、パリ国立管弦楽団、フランス国立管弦楽団などのメンバーと共演。09年に帰国。10年文化庁国際交流基金の支援のもとアルジェリアにてリサイタルを行う。ピアノを三浦捷子、川上昌裕、伴奏法と室内楽を J.ケルネル、山洞智、C.イバルディの各氏に師事。草津アカデミー、京都フランスアカデミーにて、A.シピリ、パスカル・ロジェ氏のクラス受講。東京音楽大学非常勤講師(伴奏、室内楽)